OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	さすらう大陸歌謡ー昭和期の大衆音楽に関する貫戦史的研究ー
Author(s)	張, 佳能
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92017
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　張　佳能　）	
論文題名	さすらう大陸歌謡 ── 昭和期の大衆音楽に関する貫戦史的研究 ──

論文内容の要旨

本博士論文は、戦前から戦後初期にかけて生産・受容され続けていた大陸歌謡の変遷に焦点を当てることによって、大陸歌謡が特定な方向や文脈で解釈されることの多い先行する諸言説と一線を画し、レコード歌謡の生産システム、時の大衆文化との相互影響、多様な受容ルートと変容のプロセスといった実態に沿った観点に基づき、連続性と流動性を兼ね備えた音楽ジャンルである大陸歌謡の貫戦史を描き出すうえで、昭和期の大衆音楽を貫戦史という視座から捉え直す事例研究として、昭和期の大衆音楽史の構築について新たな可能性を示唆するものである。本博士論文は、全五章から成る。

第一章では、昭和一桁、十年代に生まれた「谷間世代」が持つ「戦前の歌を戦後で初めて聴く」という特殊な音楽体験から、敗戦をもって大衆音楽史を区切る「リンゴの唄史観」に疑問を呈しつつ、当時の雑多とした音楽環境や多様な聴取体験への注目が必要だと指摘する。このような戦後初期まで続く戦前の流行歌の受容形態に加え、昭和初期から昭和三〇年代までにレコード歌謡の生産システムとして支配的な地位を占めてきた「レコード会社専属制度」を取り上げ、レコード会社専属制度時代を戦前戦後の連続性を強調する「貫戦 Transwar」というアプローチから検討する可能性を提起する。貫戦的大陸歌謡論を展開する次の各章に先立って、本章は長らく日本の大衆音楽を語る定型として広く受け入れられてきた「世相論」を取り上げ、そのレコード歌謡の生産システムや実際の受容の仕方を検証せずに社会現象や風潮との連動から流行歌を価値づけるという言説装置の問題点を指摘する。また、社会学的アプローチによる流行歌論に成功した古典である見田宗介の『近代日本の心情の歴史』（1967）について、その成果と限界を議論することを通して新たなアプローチの必要性を主張する。従来の流行歌史の記述を乗り越えるにあたって、細川周平が『近代日本の音楽百年』（2020）で提示した「歌は世にもつれ」という認識のように、縦で書かれてきた単純な流行歌史にはない、横に無限に広がる複雑な大陸歌謡の諸相に注目すべきである。

第二章では、戦前戦後の連続性を理解するうえでの重要性が指摘されてきた岡晴夫を中心に、大陸歌謡の代表作でもある岡の「花売娘」シリーズに焦点を当てることにし、すでに多くの先行研究によって語られてきた「花売娘」ものを主に三つの側面から論ずる。一つは戦前の「花売娘」の表象は欧米圏の東洋幻想のみならず、同時期大衆音楽や映画、小説などの大衆文化と強く影響し合うものであり、大陸歌謡の創出と受容には「日本人の大陸に対する想像」だけでは収まりきれない複雑な文脈が存在することである。もう一つは「花売娘」三部作を世に送り出した岡晴夫・上原げんとコンビを取り上げ、昭和期のレコード歌謡の歌手と作家にしては珍しい「流しあがり」という点に着目し、当時の大衆文化の諸ジャンルの間で流動する異国情緒がいかに「花売娘」下地になったかについての議論からその創出プロセスを明らかにする作業である。そして最後は、敗戦後から昭和三〇年代に「花売娘」ものとその亜流が生産・受容され続けていた事実から、従来の言説および先行研究に見落とされてきた戦後の「花売娘」シリーズを検証し、これらの事例によってレコード歌謡の貫戦史の一端を明かし、さらにレコード歌謡の文脈では扱いきれないアマチュア音楽実践の重要性を提示する。

第三章では、「上海リル」の音楽史的事例と関連証言を整理・分析したうえで、《Shanghai Lil》から《上海リル》へ、さらに戦後の《上海帰りのリル》へと繋がれていった軌跡を明らかにする。本章の前半で議論したように、西洋のオリエンタリズムの代表である上海イメージの系譜の中で誕生した「上海リル」は、映画と音楽を通して西洋（アメリカ）から東洋（日本）に越境し、1930年代の「上海ブーム」と相まって日本でジャズ・ソングとして定着したほか、松竹少女歌劇が《上海リル》を下敷きに独自の物語を作り出したことは、「上海リル」のローカル化の先駆けとして位置付けられる。戦前において大陸イメージとしての「リル」像はおおむね一貫しているものだったと言えるが、本章は戦前戦後の「リル」像の変遷から、《上海帰りのリル》が《上海リル》の戦後版／アンサーソングだという認識は事実とかけ離れていると指摘する。その「小悪魔的な異人」（戦前）から「流離の夜の女」（戦後）への変

化プロセスには、戦前からの連続と戦後の文脈における再編という二つの側面の混淆が確認できる。本章の後半で指摘したように、《上海帰りのリル》は《上海リル》の「男が女を探す」という図式を踏襲しつつ、戦後日本の独自の文脈で再構築されたものであり、大陸歌謡が貫戦的でありながら単なる戦前の機械的な繰り返しではないことは明らかである。戦前の「上海リル」をめぐる諸事例から戦後初期の「リル」ブームまで、おおむね貫戦期にあたるこの時期の連続性を「線」とすれば、その後「リル」をモチーフとする歌謡曲、小説、映画、マンガなどの事例は「点」として大陸歌謡の後景化を解明することにおいて注目に値する。これらの貫戦期以降の個別な事例において「リル」の異国情緒の象徴としての機能は必ずしも失われたわけではないが、本章は近年の連続テレビ小説『ひよっこ』（2017）の主題歌である桑田佳祐の《若い広場》のような、むしろ昭和への郷愁を表す記号として「リル」が再構築された事例の現れについても検証の作業を行う。欧米から日本へ、戦前から戦後へ、そして今日まで受け継がれた「リル」の歴史を紐解く本章は、戦前の日本と大陸という二項関係で捉えられがちだった大陸歌謡というカテゴリー自体を、一連の「上海リル」ものへの検証を通して、歴史的にも地理的にも多層的に考えるための重要な事例として提示する。

第四章では、戦前の満洲にある旧制高校で作られた学生歌である《北帰行》（1941）が、いかにレコード歌謡の生産システムにたよらずに戦後初期まで伝承され続け、そして最終的にレコード産業の文脈に回収されて小林旭の代表曲《北帰行》（1961）になったかの経緯を検証する。昭和三〇年代に流行歌として売り出される以前、《北帰行》は他のレコード会社が作った大陸歌謡と違い、素人によって作られ、歌い継がれていた。こうしたすなわちアマチュア実践というレコードによらない伝承ルートは、貫戦期の大衆音楽を考えるうえでは無視できない現象であり、このような軌跡を辿った《北帰行》はまさに大陸歌謡の多様な受容形態を考えさせてくれる好例である。本章はまず学生歌としての《北帰行》の創作と初期の旧制高校／新制大学における伝承に着目し、歌詞の齟齬や替唄の存在などを検証する。そして戦後の登山ブームと歌声喫茶などの新たなアマチュア音楽実践の場において、《北帰行》は単なる学生歌ではなく詠人不知の「民謡」として認知されるようになり、集団就職などの戦後の新しい現象によって生まれた「北」への望郷という主題にぴったり合うものとして広く歌われていたことを指摘する。また詠人不知の歌が一時期盛んにレコード歌謡化されるなか、《北帰行》がレコード会社によって吹き込まれて流行歌となり、さらに映画化につながった過程を検証することによって、《北帰行》をめぐるさまざまな思惑を明らかにする。《北帰行》が戦後の文脈で繰り返し解釈された結果、その大陸歌謡としての側面が忘れ去られ、いくつかの史実に基づかない観念的な解釈を生み出したが、戦後日本の大衆音楽における「北」イメージへ大きな影響を与えたことを指摘する。大陸歌謡によって支えられてきた「北」イメージの外地から内地へ、戦前から戦後への転回は、大陸歌謡と戦後日本の大衆音楽の交錯を考えるうえでは重要であり、《北帰行》に関する議論は最終的に大衆音楽史の見落としてきた諸側面を浮かび上がらせることにつながる。

第五章では、前章で議論しきれなかった「詠人不知」の歌の発掘に焦点を当て、《南国土佐を後にして》と《北帰行》のような「隠れ大陸歌謡」の再発見を取り囲む「リバイバル・ブーム」という特殊な音楽史事例を昭和三〇年代の音楽シーンから検討する。リバイバル・ブームが起こった昭和三〇年代半ばは、レコード歌謡の貫戦史を大きく規定する「レコード会社専属制度」が崩壊しつつあり、これまでのレコード歌謡によらないルートで伝承されてきた歌がつぎつぎと再発見される時期であると同時に、これまでの大陸歌謡を受容する聴衆層とは異なる戦後派の若者がメインストリームに登場する時代でもある。貫戦期における大陸歌謡を含む従来の流行歌に転換を迫ったこのブームは、しばしば「懐メロ」ブームの前奏として語られているが、本章はこのような捉え方の問題点を指摘する。専属制度が緩みかけつつもなお支配的だった1960年前後に従来の流行歌とその生産システムに「リバイバル」という方法で抵抗する若手歌手は、専属制度の崩壊とレコード会社の方針転換、フリー作家の台頭とシンガーソングライターの出現といった1960年代に起きた変化を経て従来の流行歌のリサイクルから離れ、「懐メロ」ブームの当時では洋楽に傾倒する若手歌手と従来の流行歌手との緊張感ある対立関係がすでに解消されていたと言える。リバイバル・ブームがもたらした古い歌への新しい関心およびその意義は、昭和四〇年代の「懐メロ」などの現象やアプローチとは根本的に異なるということであり、独自性を有するこのブームはレコード会社専属制度が終わりを迎えつつある「昭和三〇年代」という文脈から考える必要があるのだ。その後の「懐メロ」にせよ、「ニュー・ミュージック」による「服部良一」の再発見にせよ、あるいは1980年代からの「アジア」ブームなどから大陸歌謡が新たな文脈で再受容されることにせよ、戦前から昭和三〇年代までの貫戦的大陸歌謡とは別に議論する必要がある。

本博士論文は上記のような問題設定とアプローチをもとに、大陸歌謡の生産・受容・変容・再受容・再構築の諸プロセスをなるべく検証し、連続性と流動性のある昭和期の大衆音楽史のなかで「さまよう大陸歌謡」の実態を解明しようと試みた。大陸歌謡研究の刷新を目指す本論は、一音楽ジャンルをめぐる新しい研究のみならず、昭和期の大衆音楽を貫戦史の観点から捉え直す有効性を示す事例研究として位置付けられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（　張　佳能　）	
論文審査担当者	（職）　氏名 主 査　大阪大学　教授　輪島　裕介 副 査　大阪大学　教授　伊東　信宏 副 査　大阪大学　教授　永田　靖 副 査　東京大学　名誉教授　渡辺　裕

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　さすらう大陸歌謡―昭和期の大衆音楽に関する貫戦史的研究―

学位申請者　張　佳能

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　輪島　裕介
副査　大阪大学教授　伊東　信宏
副査　大阪大学教授　永田　靖
副査　東京大学名誉教授　渡辺　裕

【論文内容の要旨】

本論文は、「日中戦争期に量産された中国大陸を題材とした日本製の流行歌」として一般に理解される「大陸歌謡」を主題とする。大陸歌謡は、学術研究においても一般向けの大衆歌謡史においても、戦時期に限定して制作・受容された歌謡として理解されてきたが、本論文では、「貫戦期」という概念を導入し、日本の敗戦と帝国の瓦解とともに消滅したかのように考えられていた大陸歌謡やそれに由来する表現が、そのまま、あるいは微妙に形を変えて戦後においても様々な文脈で引き継がれてきたと主張する。

註と参考文献を含め全１２５ページの論文は序と結に挟まれた全五章からなる。序において大陸歌謡に関する先行研究の簡潔な紹介と問題提起がなされ、全体の構成が示される。第一章では、1945 年を決定的な断絶とみなし、「リンゴの唄」を特権的な「戦後」の出発点とみなす一般的な大衆音楽史記述を批判する。戦後に「民主化」されたラジオを通じて戦前の流行歌に初めて親しんだ世代の経験を強調し、また、レコード制作システムにおける 1930 年代から 60 年代までの連続性を示し、「貫戦史」という視点を採用することの意義が示される。

第二章から第四章は、章ごとに大陸歌謡の具体的な楽曲とモチーフを取り上げ詳細に分析する。第二章では「花売娘」という主題を取り上げ、文学や映画において「西洋的」な情緒を通じて描かれてきたその存在が、昭和一四年の「上海の花売娘」によって「大陸」と結びつき、その後定番の意匠となったことを指摘した上で、戦後すぐの「東京の花売娘」では、戦前の日本人男性から異国の花売娘への視線が、戦後では占領軍の米兵から日本人の花売娘への視線に変換されていることを指摘する。第三章では、アメリカの映画挿入歌「上海リル」（1933）の日本での受容と、同曲を参照して作られ爆発的なヒットとなった「上海帰りのリル」（1952）を取り上げる。アメリカにおける「東洋」へのエキゾチズムが帝国日本においていかに取り込まれたかを示したのち、その記憶が、戦後においてどのように連続・断絶しているかについて検討する。ヒット時の文脈にとどまらず、現代における桑田佳祐による「リル」のモチーフの再利用に至るまで、様々な事例が紹介される。第四章では、1941 年に作られた旧制旅順高校の学生歌が、1960 年頃に「詠み人知らず」の歌としてレコード化され人気を博した「北帰行」の来歴を検討する。一般には「大陸歌謡」とはみなされないが、「大陸」において「大陸」を歌ったアマチュアが作った歌である「北帰行」の伝承と変容の過程を丁寧に追いながら、大衆歌謡（及び日本の文化全般）における

「北」の表象が、「大陸」から「北日本」を含意するものに変化してゆく転換点として同曲を位置づける。

第五章では、「北帰行」の流行の背景をなす 1960 年前後のレコード界における「リバイバル・ブーム」を取り上げる。ロカビリー・ブーム以降の若い歌手が、外来の音楽スタイルを取り入れた編曲で古い流行歌で歌うことを、貫戦期に特有のレコード制作スタイルである専属制度の動揺と関連付け、貫戦期の連続性がこれ以降失われてゆくことを暗示する。短い結では、全体の議論を改めて概観し、今後の課題を提示する。

【論文審査の結果の要旨】

公開審査は 2 月 10 日に約 2 時間にわたって行われた。

従来、もっぱら帝国日本と結び付けられてきた「大陸歌謡」を、「戦後」との連続性において捉える着想は独創的である。第二章から四章の事例研究は圧倒的な情報量をもち、説得的である。特に第四章で、従来「大陸歌謡」とは考えられてこなかった、旧満洲の学生によるアマチュア楽曲である「北帰行」を取り上げ、満洲や中国大陸を含意する帝国期の「北」の表象と、1960 年代以降の流行歌（「演歌」）における日本国内の「北」への志向を架橋する議論に成功しており、近代日本大衆歌謡史研究に重要な貢献を果たしている。各章の記述においては、レコード、映画、雑誌、文学作品などの徹底した資料の精査に基づいて、大衆文化史に関わる膨大なエピソードが詰め込まれ、それらを表現するユーモアやレトリックを含む達意の文章は、日本語が母語ではないという留保をつけずとも、圧倒的といってよい。

各章の記述は豊富な実例に裏付けられて説得的であり、当該論文の議論を超えて様々な研究領域と接続しうる魅力的なエピソードに満ちている。しかし一方で、個々のエピソードを論文の論理構造に適切に位置づけてゆく議論が相対的に少なく、情報過多の印象を与える、という意見も出された。特に、第五章はリバイバル・ブームという重要な現象についての先駆的な研究として評価できるが、一方、大陸歌謡そのものとは必ずしもうまく接続しておらず、第四章の背景として順序を逆にするか、またはリバイバル・ブームにおける大陸歌謡の不在を積極的に強調することで、貫戦期的連続性のひとつの終焉としてはっきりと位置づけることができたかもしれない。

大陸歌謡を帝国日本の政治性に（しばしば粗雑に）還元する傾向が優勢であったこれまでの通俗歌謡史言説の批判という企図は十分評価できる。その一方で、文化表象の政治性に関する分析をあえて禁欲したことで、他者表象と自己表象の絡まり合い自体をジャンルの核とするである大陸歌謡において不可欠な分析の次元である政治性の視点が弱まったことも否めない。たとえば、エピソード的に言及される、「上海の花売娘」と「東京の花売娘」におけるジェンダーとエスニシティの反転や、沖縄・石垣島のアマチュア実践における大陸歌謡や花売娘にまつわる楽曲の伝承といった興味深い事例は、あからさまに政治的な含意をもつ事柄であり、大陸歌謡の戦後という主題を考究する上で、エピソード的な言及ではなく詳細な分析が可能であり必要である。

独創的で力強い議論の展開とひきかえに、民族音楽学者エドガー・ポープによる博士論文など重要な研究の内容が十分に紹介されていないきらいもある。研究史の文脈を共有していない読者のためには、戦前の大陸歌謡に関する基本的な特徴を簡潔に紹介しておくほうが親切だったかもしれない。それに関連して、論文において依拠すべき学術的な先行研究と、批判の対象としての歴史記述が必ずしも十分に区別されていない傾向も指摘された。

以上のような問題も指摘されたが、それはむしろ今後の課題とすべきもので、本論文の問題設定の重要性と事例研究の圧倒的な充実については審査員全員が認めるところである。よって、本論文を、博士（文学）に相応しいものと認定する。